関西自然保護機構会報（17）19—21，1989

コメント—大台ヶ原トウヒ林保全の現場から—

武　田　明　正
（三重大学生物資源学部）

大台ヶ原の主峰である日出ケ岳をはじめ，正木嶺，巴岳などの山頂付近には，トウヒ，ウラジロモミ，コメツガなどの常緑針葉樹を主林木とする森林が成立している。この常緑針葉樹林が，過去15年ほどの間に著しい獣害を受け，最近では，林冠構成木の立ち枯れが目だつようになってきた。なお，この獣害の急激な進展状況は，奈良自然環境研究会：大台ヶ原原生林における植生変化の実態と保護管理手法に関する調査報告書（1984）に詳しい。

このため，昭和61年度から3年計画で，環境庁自然保護局，吉野熊野国立公園管理事務所（新宮市）では，景観維持を目的とした保全事業を行うため，「大台ヶ原トウヒ林保全対策検討会」（座長：菅沼孝之，奈良女子大学教授）を組織した。

筆者は，その検討会の末席に連なるものとして，保全対策事業の現場から，今回のシンポジウム「シカと人と植物」で，二，三簡単なコメントをするようにとの依頼を主催者から受けた。十分な準備もなしに参加したせいで，シンポジウムの当日，下田勝久（大阪市大，理学部）・高槻成紀（東北大，理学部）両氏の講演を拝聴しながら，何をどの様にコメントしたらよいか苦慮した。当然の結果として，十分なコメントが出来なかった。あれから三ケ月たった現在でも，未だに十分に整理が出来ないでいる。

春日山の場合，常緑広葉樹林中に新たに形成された裸地を埋めるはずの陽樹類がシカの食餌となってしまうため，森林の更新に少なからぬ影響を与えているらしい。金華山島では，過去にシカの大量死が見られたが，シカ個体群の消長と植生類型の量的変化との間には密接な関係があるらしい。

確かに，大台ヶ原においてもシカと思われる獣が，トウヒ林に壊滅的な影響を与えつつある。「植生とシカの問題」とまで捨象してしまえば，高見の見物を決め込むのと同じで，気が楽になる。

「おたくでもそうですか。」

「実は，うちにも類似の問題が発生しています。」

「一体全体，どうしてでしょうね。」

「シカの個体数が増えすぎたためでしょうか。」

「さぁ……，よく調べて見ないとその原因は判りません。」

「それにしても，大台ヶ原のシカは，どうしてトウヒの樹皮など食べるのでしょうね，食餌となる植物は他にも沢山有りそうなのに。」

「何れにしても，研究するには面白そうな問題です。」

でかたがつく。

関西自然保護機構業績第66号

一方，なぜこの様な事態に至ったかを十分に明らかに出来ない段階で，「自然公園の内で，シカと思われる獣がトウヒ林の衰退に一役かっているようなので，その働きを止めさせ，トウヒ林を復活させるには，どの様にしたらよいか。」という試験問題に答案を書くとなると，途端に気が重くなる。別の意味で「人の問題」が絡んでくるからである。

「10年や20年でトウヒ林の復旧など出来る訳がない。自然を管理しようなんて，思い上がりもはなはだしい。」

「もとは，人が大台ヶ原の自然を破壊したからではないか，姑息な手段を弄さず，人を締めだして，あるがままにしておけばよい。」

と批判を受けることは目に見えている。

事実，調べた範囲においては，大台ヶ原のトウヒ林の林齢はおおよそ70—130年程度と推測され，自然状態では実生が樹高１ｍ以上に成長するには，早いものでも10年はかかるようだ。一朝一夕でトウヒ林の復旧などできる訳がないことは承知している。それでも，手順さえ間違えなければ，一般の人工林が成林するのと同じ程度の年月で，トウヒ林を成林させることが出来ることもまた夢ではないと思っている。

ここで，大台ヶ原トウヒ林保全対策として，どの様な試みが進行中か，簡単に紹介しておく。

トウヒ林保全対策の基本方針は，特定自然環境地域保全管理報告書（日本野生生物研究センター，1985）が提言した保全計画「トウヒ林衰退地区（植生復元地区）では，トウヒ林景観を維持するため，トウヒの更新を促す処置あるいは補植（植生復元）を検討する。動物個体数の調節管理は，動物個体数に対する影響予測が現時点では明確でないため，防鹿柵あるいは食害防止網設置による植物側の食害対策を検討する。」を受けたものである。

即ち，「シカ側の問題」をひとまず棚上げにして，とりあえずは，シカとトウヒの接触を物理的に絶ち，トウヒの更新を促す方策を考える。これならば，合格点かどうか判らぬが，とにかく先の問題に対して答案らしきものを書くことが出来る。

この基本方針にそって具体化された事業として，既存の立木に対しては保護柵による囲い込み，食害防止テープの巻き付けなどが試みられた。トウヒの更新促進にしては，現地に生育している母樹から採取した種子の人工下種が行われた。これには，更新の容易さを考えて，倒木上あるいはコケ型の林床に限定した直播，さらにはミズゴケと鹿沼土とからなる植生袋や発芽床への播種が試みられている。また，補植のためのポット苗の育成も行われつつある。

事業実施の過程で，播種のための種子の確保・結実周期の問題，播種された種子を食べる小動物の問題，育苗過程での菌害問題などいろいろな問題点が指摘されている。しかし，これらの問題点は，従来から蓄積されてきた育林技術を大台ヶ原の現地に合わせて改良すれば解決でき，トウヒ林の成林は十分に期待できると，筆者は考えている。

けれども，果してこれでよいのだろうか？保護柵の中でトウヒ林の保続が保証されたとして，自然公園にふさわしい景観の維持が出来たと言えるだろうか？

筆者は，保護柵のない状態が本物と考えている。しかし，「自然のあるがままに任せて，トウヒ林など消えてしまっても，見晴らしのよいミヤコザサ群落が残ればそれでよい」とする考えに組するわけではない。少なくとも，20年ほど前までは，保護柵なしでシカとトウヒ林が共存していたからである。

筆者の身辺では，国の天然記念物として，いっさい人手を加えず，手厚く保護されてきたはずの植物群落が衰退し，絶滅に瀕している事例が多くみられる。その植物群落を支えてきた立地条

件が周辺の開発によって大きく変化したためと推測されている。この場合，立地条件を復旧し，植物群落を維持していくためには，強力な「管理」が必要になっている。

規模の大小に違いはあるが，1haに満たない植物群落も数百haの大台ヶ原でも，そこに生じている現象は同じである。周辺をスギ・ヒノキの単純林が取り囲んでしまった現在，大台ヶ原の過去の生物群集を保全して未来に伝えていこうとするならば，早急に「シカ側の問題」を棚から下ろす必要があろう。それが，耳触りの悪い，シカの密度調節であっても。そのための，調査・研究を望みたい。

なお，小文の終わりに当たり，ここに述べた意見は，検討会のものではなく筆者の個人的意見であることをお断りしておく。